アントナン・アルトーへの導き

アルチュール・アダモフ
訳・及川広信

アントナン・アルトーの作品は、どんなものかという興味から、ひとは近づく。ある人にとっては、アルトーは生存するもっとも偉大な詩人である。また、ある人にとっては、唯一の真の詩人である。アルトーに対して、一般の人が注意を向けたのは、彼が精神病者の隔離所へ監禁されたスキャンダルと、そこからの最近の解放があってからである。

なぜ彼が唯一の真の詩人なのか？彼の作品は読む者を混乱させ、**その作品が開かれた門のように、人がけっして入ろうとしなかった場所に導くからである。その門は、ごくあたりまえのように、リアリティの上に、ぽっかり口を開いているからである。**

《書物の向こう側に、いちどでも運んでくれる本はないものか？》とニーチェは書いている。

偉大な詩人たちは、共通のものを持っている。かれらの人生は、自己の限界を乗り越えることに没頭する。アントナン・アルトーは、その意味で、自己の限界を踏み越えた孤高の人だった。

アントナン・アルトーの最初に出版された作品が、当時**ヌーベル・ルヴュ・フランセーズ**の編集長であったジャック・リヴィエールとの間に交された**書簡集**であったことは、偶然とは思われない。（アルトーの書簡は、それだけで、彼の作品の重要な部分を占めている。それは、彼がどの部分で文学の在り方と齟齬していたかを証明している）。

アントナン・アルトーが自分の思考を表現することが出来ないという強迫観念を、最初に述べたのはこの書簡集の中でである。この強迫観念は、その後間もなく、**神経の秤**のなかで明瞭

に詳説される――

《私の状態の、微細な部分に応じきれる言語を、見い出すことが出来ない。》

そしてまた、冥府の臍のなかでは

そう、私の思考は、自分自身を知っている。私の思考は、遂げることが出来ずに、失望している。あえて云うが、私の思考は、自分自身を疑い、いづれにしろ、自分を感じることが出来なくなっている。私は思考の肉体的生命、実体的生命のことを云っているのだが。

アントナン・アルトーの作品の深遠なオリジナリティ、その重要な特性は、意識と生理の状態の細部にわたる恐るべき報告であるということ、それは想像されたものでなく、体験されたものであり、死と隣接したものである、ということである。

アントナン・アルトーの作品のなかで、一般の人が興味を抱くものは、**演劇とその二重性**である。しかし、この本は、ひとが思っているほど、アルトーの探求の最終のものではない。この本は、ゴールドン・クレーグの作品がそうであるように、演劇の分野のアクティヴィティだけのものではない。

演劇に関しての、化石化したイデーは、影を見失った文化の、化石化したイデーと一体となっている……

……だが真の演劇は、生命がまだ宿っている影を揺り動かす。なぜなら、真の演劇は、動き、人生に対して、生きた方便となるからである。

アントナン・アルトーは、身振り、音、叫びを犠牲にしている言語の権威を放棄する。云いかえると、それは、今日の西洋の演劇のすべてに該当することでもある。彼は言語を、もしそれが存在するならば、目に見える造形的なものに物質化する演出に、身をもって打ち込もうとしていた。

分節された言語（ランガージュ）と、身振りのオブジェ化した表現の上に乗せた語（モ）の表現で、舞台を支配すること。とりわけ、空間に置かれた感覚器官によって精神に至ろうとすることは、舞台の物質的な必然性に背を向けることであり、その可能性に逆らうことである。

アントナン・アルトーにとって、演劇は心理的なものではなく、肉体的なものであり、魔術的なものである。

最初に抑えられ、ついで突然天空に放り出される、サイン（記号）のこの激しい自由への開放のなかに、魔術的な手術によって精神を分かち合うなにものかがある。

残酷さの観念は、彼のすべての作品のなかに挿入され、活気を与えている。

行動するものは、すべて残酷である。演劇は改革されるべきだという説は、この行動についての、過激な思想の上に成り立っている。

残酷さとは何か？

この苛酷さ、被害者として生き、あらゆる責苦と踏み付けの中で経験する人生。

アルトーのいう残酷さとは、《無情な人間を襲う、獣的な欲望に従ったときに感じるもの》とは違う。

犠牲を供する古代の儀式のように、残酷の演劇は、人生に力を及ぼしている、漠然とした無意識の作用を支配し、方向づけようとする。

激しさと血が、思考の激しさのために役立つという考えから、激しい場面が血をおどらせると、なにか崇高な行為が行われているように感じる観客を、私は拒否する。――戦争とか、騒乱とか、向う見ずな暗殺とかのイデーに、自己の外側で耽溺している観客を、私は拒否する。

アルトーの《場合》、語ることは難かしい。結末としての、いやな裁断が行われなかったから、アントナン・アルトーのテ

ーマで次のことをいうのは、いささか不適当かもしれないが――むしろ、ネルヴァールとかヴァン・ゴッホの場合に向いてはいるが――疑いもなく、ある種の人間の思考と人生は、恐ろしい地辺りの状態にある。この地辺りのなかに、それぞれの特殊性を保ちながら、彼らの運命が巻き込まれて行っている。

一九二〇年頃のシュールレアリストの闘争に始まって、アントナン・アルトーの人生と、その活動は、文学の作法様式とは、あまり反りが合わなかった。結果として、彼はルーアンの隔離所に入り（一九三八年）その後、アーブル、サントアーヌ、ビルエバール、ロデスの各隔離所を転々とすることになるが、真の人生が、彼を見捨てることがなかったので、そこから抜け出ることが出来なかった。

彼の個人的な運命のなかで、苦痛と試練に遭いながら、アントナン・アルトーは、いわば痛め付けられながら生きる最後の道程のなかで、ねじ曲げられ、責め苛まれなければならなかった。

ひとは、運も時とともに、その有害性を失うものと思いがちである――一九一六年の九月、大戦の格好な状況のプレテキストの下に、麻薬の使用が行われ、それ以後、ドクター・アシール・デルマのような高名な医師（彼は、ある種の体質的な不安のケースにのみ、阿片の使用を認めている。）の忠告にも拘わらず、継続して行われる。

ロベール・デスノスとロジェ・ジルベール・ルコントについで、アントナン・アルトーは、唯一人、法律のタブーを公然と否認することになる。

《公式文書は、意識の分野に対して、なんの効力も持っていない。死よりもまず、私は私自身の苦悩の主人公であるということを、知ってもらいたい。すべての人間は、肉体的な苦しみを、極力避けようとするし、精神が空白状態であり続けることを怖れるものだ。》

……《もし、私が明晰さを失なったならば、医師のなすべきことはひとつである。――明晰さの使用を取り戻してくれる物質を、私に与えること。》

公認の医師は、法律を盾に、病人から苦しみに対する唯一の救いまでも奪いとり、自分を権威づけているだけでなく、現状のままでおく代りに、それなりの理由があるのだろうが、限定されたわけでもない、ノーマルな基準に従って、患者の健康を立て直そうとする。単なる偶然の仮説に則って、危険性を持たぬように、独自の使用法を行っていたのが、あの問題の電気ショック治療法である。

電気ショックには、空白状態があり、そのことによって、すべてが混乱させられる。瞬間、知覚しないだけでなく、怖ろしくあきれるほど、以前のことを忘れてしまうのだ。

私はそこを通過した。そして、そのことを忘れないだろう……

立ち合いの医師が、まるで企てているかのように、死を人工的に創り出すこと、それは、誰にもけっして益することのなかった虚無の逆流を優遇することである。

しかし、人間について、何ごとも興味を持つように運命づけられた、ある種の人達は、これらのことを存分にやり続けてきた。

事実、ある時点から。

それは何時？

人間であることを止めることと、はっきりと、狂人となることの選択を迫られた時。

しかし、この世の精神病者たちは、権威ある医師たちの診断を実際に受けながらも、どれほどの保証を彼らは受けているのだろうか？

人間の側から苦しまなくてはならなかった実際の迫害にも拘わらず、名づけようのない力が、アルトーを駆り立て、鎮め、作品がしだいに、その量を増すのを止めなかった。アントナン・アルトーの最近の著書は、おそらく、それを世間に紹介した人達と比較されるほどの構築度を持っていない。しかし、言葉の習慣的な意味において、作品は後戻りしているように見えるが、それは、より少ない光の場所に移っているからである。

存在の新しい啓示を示してくれるように、目を瞠らせるような内容の頁は、あまり見当らない。そこでは、アントナン・アルトーは、この世界は実在しないということ、いかに実在しないかということを云っている。彼は、そこでまた、自分自身について語っている。

……私はもう、幻覚させられた人間でいようとは思わない。世界に死が訪れる。すべて、他のものに対して行動する人間において、世界は遂に落ち、私が拒絶したこの空虚の中で落ち、そして昇り、私は世界を受け、リアリティを吐き出すからだを持つことになる。

私が拒むものを呼び、私が呼んだものを拒む月の働きを、まだ私は充分に備えている。

……この世界を捨て、そこから分離したいま、あなたと語り、この世界にいることの幸せを知らぬ人間とは、真に失望した人間のことである。

死と他物は、別々のものではない。彼らは自分の死骸の周りを廻っている。私は死んではいない。しかし私は分離している。

存在の新しい啓示を持つことによって、ひとは予言的な精神に達する。しかし、予言は当らない。時代は、単純には覆らないのだ、単純にはもう。

アントナン・アルトーの最後のころの頁は――それは、作家の激しい活動の再開を徴しづけるものであるが――例外なく、良質のヴィジョンを持っている。すべて、精神の差し迫った必要性から迸り、ページの中から選び出すことは難しい。すべての頁は、みな引用に向いている――

亡くなった小さな娘が云う――私は、生きてる人の肺の中に、恐ろしさから吹き出す。と、誰かが直ぐ、そこから抱きあげてくれる。

からだは、狂った一群のものである。また、内蔵するものを、顕わし続けてきた、折り畳みの旅行カバンのようなものである。それは、すべてのリアリティを押し包んでいる。

アルトーの最近に書いたものの中には、心を強く捕えるものがある。それはフォルムの全体に及ぶ発明であり、ことばの発掘であり、小止みなく改革する、いうなれば、音声の奇蹟である。フレーズが残忍にこすれて、不快な音を出し、破壊されているだけでなく、それが呪文にまで高まり、新たな道を通って、詩となっている。それは、韻のことをも問題にしない、新たに発見されたアソナンス（同一、または類似の母音の繰返し）である。

芸術と人生を別々に考えなかったひとりの人間のなかに、いわば直接的で、肉体的な言語として、肉体化されたイデーの進展を見るようになる。それ以来、アルトーにとっては、騙すことのない唯一の、価値ある肉体を除けば、すべては疑わしいものとなる。初期のころはともかく、「演劇とその二重性」の頃までは、アントナン・アルトーは東洋の伝統とプラトニズムに惹かれていた。が、現在彼は、次のように書いている――

私は物質というものが、存在するということを、信じない
何かえたいの知れぬもの……
……私は信じない、方角も
イデーも
私はフォルムを信じない

秘法のものであろうと、具象であろうと
また、抽象であろうと
……私は原理としての、秘法のフォルムがあるということを信じない（なぜなら、唯一の原理も複数の原理も信じないから）。

からだは唯一の真理である――
未知のものを
表現するには
肉によって
ただ肉だけによってである。

アントナン・アルトーは、おそらくロートレアモンと並んで、フランス文学に位置づけられるだろう。アルトーはロートレアモンの激しさと、革命の精神を受け継いでいるように思われる。アントナン・アルトーの作品の場合、重要な部分に出会ったとき、倫理的に熟考させられる。アルトーの作品のなかでは、詩はナイーブな状態で、あらゆる部分にわたって彼に生命力を与え、量ることの出来ない苦悩の要素に溢れているかのように見える。

存在の中心を瞬間見失うということは、アントナン・アルトーを裏切ることになる。アルトーは演劇とその二重性のなかで、こう言っている――

そして現在、地獄の真に呪われるべきものがあるとするなら、それは、演劇が死刑の宣告を受けて火炙り台上のサイン（記号）となるよりも、フォルムの上に、芸術的に自分の生命を引き延ばしていることである。

（一九四六年）